まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第６７号（令和５年９月１５日）
読者数：６７６名（募集中）
ﾒｰﾙ:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
HP:https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

ウクライナに平和を！平和を我らに！

○広島平和記念式典開催

○ひろしま盆ダンス開催

○被服支廠４号棟と薫風寮

○はだしのゲン

目　次

○巻頭言：広島の街……ガリバープロダクツ代表　通谷　章
○特別寄稿：広島市の「まちづくり」はどうなっていくのか…前市議員　馬庭恭子
○ひろしまのまちづくりの動き
・広島平和記念式典開催
・ひろしまゲートパークでひろしま盆ダンス開催
・サカスタ広場エリア施設の整備に着手
・旧陸軍被服支廠、文化財指定の方向
○ほっとコーナー：下町のような風情があれば…役者・パフォーマー　大槻オサム
○中央図書館等再整備に関わる基本設計案を分析する…… 一建築人　瀧口信二
○「Hihukusho ラジオ」報告：ゲスト　立花志瑞雄（ＮＰＯ法人ＷＦＣ理事長）
○被服支廠４号棟と薫風寮：わかげ会（広島大学サイクリング部ＯＢ会）立川元英
○本の紹介：はだしのゲン　著者：中沢啓治
○編集後記：おしろい気なしの中年美人…… 編集委員　前岡智之

□ 巻頭言

広島の街

ガリバープロダクツ代表　通谷　章

広島の街は美しい。市中の至るところから、自然が見えてくる。北西に目をやると穏やかに続く山並み。東に目を転じると比治山や黄金山がぽっかりと。少し眺望の利く場所に体を移せば、瀬戸の海に優しげな多島。波を蹴った白い轍の筋も遠目に見えてくる。

都市の美観も見逃せない。先人の労苦が幾粒もの結晶となって街を輝かせている。東西を貫く百メートル道路。樹木が落とす涼やかな陰や葉間を縫った陽射しを楽しみ、朝な夕なに歩く人がいる。この広々とした道路の恩恵は様々で、広島に初めて足を踏み入れた人にとっても方向をつけやすい。

つい、造形に走りがちな街に彩りを添えているのが、普段なにげなく目にする幾つもの川。多少の手が入ろうとも川の流れは今も滔々と。他県の人が「こんなに大きな川がたくさん流れているなんて羨ましい」と言った言葉が忘れられない。かつての七河川は六つになったが、珍しく貴重な都市であることに変わりはない。そう、広島の美しさは幾つも挙げられる。大きく深い呼吸をしやすいのがこの街の大きな特徴。あの惨禍がこの地で起こったことは殊更に意識せねば探し出すのが難しくなっている。

今一度言う。広島の街は美しい。誰しもに誇れる。わが故郷ここにありと声を大きくしても恥じ入ることはない。だが、ふっと物足りなさを感じる自分がいる。それは一体どうしてなのだろう。美しさの影に隠れているものだろうか。

美しさの代償として考えられるのが、裏面の剥離。都市の語感からくるワクワク感、躍動感を見つけにくい側面がこの街にはある。うっすらと薄化粧をした美人のように思えてならない。別の言い方が許されるなら、潜在的に街が秘めているエネルギッシユの欠如。ひたむきに生きている人々の「存在証明」のようなものであろうか。

確かに広島の街は美しい。一面焼け野原となった過去との決別が合言葉だったからなのだろうか。街の未来に求められるものは、美しさだけに収斂されて行き着くのだろうか。あざとい表情を時折覗かすのも「街たる所以」と許容されそうなものだが、広島の未来に求めるのは無理な注文なのだろうか。

広島という都市は徐々に姿を変えていく。まるで老いることを嫌うように。些少ながら卑近の例では旧市民球場跡の賑わいの創出。物々しいばかりに威容を現し始めたピースウイング。これまでの都市感を抱合し、かつ脱却しながら、絶えずどこかで槌音を奏でていく。街に死はないのかも知れない。どこかで私たちを笑いながら鼓動を止めない。広島はどのように変貌していくのであろうか。

□ 特別寄稿

広島市の「まちづくり」はどうなっていくのか

前 広島市議会議員　馬庭 恭子

2003 年の統一地方選挙で初当選して以来、5 期 20 年議員として活動をし、この 5 月 2 日をもって任期満了を機に若手にバトンを渡して、議員生活にピリオドをうった。

今、思うに、市政のリーダー、つまり市長が提案するまちづくりに関する議題が議会のなかで議論されているなか、発言ゼロ議員もいるのも事実で、同じ議員として残念であること極まりない。しかも、的をついた議論が横に置かれ、多数決であっというまに決定され、あれよあれよと物事が進んでいき、消化不良で後に市民生活に影響を与えることとなる事態が生じてしまうと危惧している。

ここでは、私自身が、「いまだに納得できず、疑問だらけ」の案件について述べる。

① 世界遺産原爆ドーム、平和公園内への「かき船」誘致

平和公園内の元安橋のたもとに突然、新築の高級料亭「かき船」が、市は一民間企業の「かき船」をにぎわいづくりの観光資源として力をいれた。しかし、その場所は、干潮時には川床で兵隊が被爆した市民のご遺体を焼却した場であり、全国のこどもたちの寄付で建立した「ヒロシマの碑」の前である。つまり、「鎮魂と祈りの場」である。

しかも、市は、「かき船」の誘致にあたり、公金で、桜の木を伐採した。景観条例を遵守している地域住民は、日常生活のなかで洗濯物も干さないなど、配慮しているにもかかわらず、窓外の景観がいままでと全く異なってくるではないか。防災の観点から護岸に大きな船があり、河川氾濫時の護岸破壊の危険性、さらに船で使用されるプロパンガスボンベ庫（50 キロ 18 本）が河岸設置されていることについて不安があると訴えた。

同時に世界遺産である原爆ドームの価値が低下するとユネスコの諮問機関であるイコモスより、懸念表明が提出され、本来、国は世界遺産条約に基づいた保護、保存、整備をしなければならないというコメントを発信した。私は、かつてポーランドのアウシュビッツ収容所を訪れたとき、負の世界遺産である収容所周辺は観光資源としてのカフエなど誘致などしていない。まったく、発想が違うのである。

平和公園外にあった２艘の「かき船」はいつのまにか１艘となり、死水域だからということで、現在河岸に２階建ての船の構造は、船の中から原爆ドームが名物牡蠣を食しながら、円形にくりぬいた窓から見えるデザインにしている。本来、景観審議会に諮らねばならないにもかかわらず、一度も開催せず、ここにいたる経緯はブラックボックスで、国、県、市、経済観光関係者による構成の「水の都ひろしま推進協議会」での議事録を情報公開請求したが、肝心部分は、黒塗り状態である。

また、この「かき船」は河川法、建築基準法、船舶法の解釈が難しい。船にはエンジンもなく、自走しない、固定されているにもかかわらず、船舶だという認識であることも疑問がある。

また、一方、近隣の店舗においては、安い河川占有料で都市河川のまん中で公的でない民間企業が、営業していることへの不信は全く拭い切れていない。

② 広島市立中央図書館群の移転

まさに、いきなりである。事前説明も議論もなく、駅前のエールエールＡ館を管理運営する第３セクター広島駅南口開発 K.K が中央図書館群を駅前ビルのテナントにと「要望」を出したことにより、市は、中央図書館群移転に拍車をかけ、移転のための設計費を上程し、動きを加速化しはじめた。

市議会では説明不足、議論も半ば、しかも文化の基幹である公有財産を中古建築物（やがて移転せざるを得ない）に移転などありえないとし、私をふくめ、一部の議員は、「反対」の論陣をはり、実際に移転を阻止する修正案も提出した。

しかし、「付帯決議附きで原案」が可決。市民意見を募集し、その結果も移転反対の意見が 7 割強という圧倒的に多い結果にもかかわらずである。ただ、署名活動、請願活動を活発化させた市民団体の力があり、こども図書館だけは、現在地での活動が生き残った。

さて、中央図書館群の跡は何ができるのか、わたしの推測では、市長が熱望している音楽専用ホールである。すでにレールを敷きつつあり、この改選期の所信表明にそれが表れている。

公共図書館等は市民が無料で利用できる知の拠点であり、後世に文化・教育といった財産を渡す、都市の品格がうかがい知れる重要な基幹施設だからこそ、あの中央公園内にあることに意味があると今でも思っている。

③ 商工会議所と基町市営駐車場との財産交換

平和公園の慰霊碑の後ろの背景に灰色の建物がある。その建物が商工会議所（高さ 46 ﾒｰﾄﾙ、9 階建て）であり、その建物がない方が慰霊碑からの景観上よしとする発想は理解できないことはない。しかし、移転しても商工会議所の後方には宗教団体ＰＬのビルがある。景観を整えたいとなれば、その宗教団体のビルの移転も必要とならないのかという考えも当然あるのではないか。しかし、商工会議所のみの移転案である。

この地域は広島市景観条例で高さ制限があり、厳密な景観審議会もある。商工会議所はその高さ制限を遵守し、自前で素晴らしいビルを建築すればよいではないか。しかし、そうではなく財産交換という手法をとり、市営駐車場周辺の再開発事業とリンクさせた。一番の疑問は、この財産交換を再開発事業の開始前に交換しているということだ。再開発事業がすべて終了したあと、広島市が財産を交換するということであれば、納得がいく。しかし、再開発事業開始前に、どう考えても地価の高い市営駐車場とそれより地価が低い商工会議所を交換するのは、市民の財産を目減りさせることにならないかと反対した。

だが、市長与党による多数決で交換が決定。なんと広島市が依頼した、不動産鑑定に基づいて、商工会議所へ財産の差額 3400 万円を支払って、中古物件の商工会議所ビルのオーナーとな

った。また、このビルの管理運営費を随意契約で商工会議所に委託している。この交換によって、広島市はテナント料の収入と委託料などを差し引きし年間約 750 万円赤字、一方、商工会議所は駐車場年間 1 億 3000 万円の収入を得るという超アンバランスな事態となっている。広島市財産条例では、市民の財産を適正に管理しなければならないとしている。結果、市長は、市民の財産を守ってはいないのである。

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島平和記念式典開催！

NHK テレビ映像より

毎年 8 月 6 日午前 8 時 15 分の原爆投下の 1 分間の黙とうを中心に広島平和記念公園で平和記念式典が開催される。今年はＧ７広島サミットが開かれた後なので、どんな式典になるか世界の注目が集まる。過去最多の 111 カ国の代表と欧州連合(EU)代表が出席し、約 5 万人が参列。会場もほぼコロナ禍前の状態に戻る。

Ｇ７サミットで発表された核軍縮文書「広島ビジョン」に対して、広島松井市長の平和宣言と湯崎知事のあいさつはそれぞれの立場で問題を提起。特に、核抑止肯定に対して松井市長は核抑止論からの脱却を訴え、湯崎知事は核抑止論者に対して、「核が使用されたときの全人類の命への責任を負えるのか」と強い調子で問いただす。

一方、岸田首相のあいさつは「広島ビジョン」の発出の意義を強調し、核兵器のない世界の実現に向けた努力を訴えるに留める。

平和記念公園内ではそれぞれの場所で慰霊式が行われた。平和記念式典と同時並行で、原爆ドーム脇では国土交通省（旧内務省）原爆殉職者慰霊式。平和記念式典終了後、引き続き原爆供養塔や動員学徒慰霊塔の前で慰霊や追悼式が営まれ、夕刻には原爆ドーム対岸の元安川親水テラスで原爆犠牲者の鎮魂と平和を願って灯ろうを流す。

8 月 6 日の広島のまちはいたる所で原爆死没者の慰霊と平和への願いが込められた行事が営まれ、真夏の蝉しぐれの声を聞きながら心静かに過ごすことが習わしとなっている。ウクライナでの戦禍に思いを馳せながら、一日も早い世界平和の訪れを希う。

② ひろしまゲートパークでひろしま盆ダンス開催！

ひろしま盆ダンスは広島の新たな夏祭りとして 2018 年に当時の市民球場跡地でスタート。2020 年・21 年はコロナ禍で中止。昨年は工事中のため宇品のみなと公園で開催し、今年 4 年ぶりに戻って 8 月 11 日・12 日の 2 日間、新生「ひろしまゲートパーク」で第 4 回目を開催。

この地は被爆 1 年後、1946 年 8 月 5 日に「平和復興市民大会」、7 日に「戦災供養盆踊り大会」が開催された旧護国神社跡地で、後に「市民ひろば」となる。1949 年には第 3 回広島平和祭（現在の平和記念式典）が開催された地であり、その痕跡として「第 2 代目平和の鐘」が今も存置している。

開会式では冒頭、死者を弔うための黙とうを捧げ、引き続き主催者の中国新聞社長と広島市長代理の副市長があいさつし、賑わいが戻ったことを喜び、平和を祈念する。初日は約 1 万 6 千人、二日目は約 1 万 8 千人が集い、熱気に満ちた踊りやパフォーマンスが繰り広げられた。グルメを中心とした屋台が並び、賑わうことは良いが、本来の目的である死者への弔いのための盆踊りが脇に置かれないようにして欲しい。

③ サカスタ広場エリア施設の整備に着手！

中央公園に建設中のサッカースタジアム周辺の広場エリアの整備と運営を担うパーク PFI の企業グループ（代表は NTT 都市開発）は 8 月に工事に着手し、来年 8 月開業予定。

エリアの商業施設は、東側の芝生広場を囲む形で飲食・アウトドア用品の店舗など 5 棟を建設し、西側の川沿いにはレストランが入る 1 棟を建設。その 6 棟の商業施設を総称して「ＨｉｒｏＰａ（ヒロパ)」と命名。企業グループは「緑豊かな自然を感じられる都心のオアシスで、パッ！と笑顔が咲くように」との願いを込めたという。

試合がなくても「365 日にぎわう公園」として年 200 万人の来場を目標に掲げているが、果たして可能であろうか。ひろしまゲートパークと同じ企業が代表となり、同じようなコンセプトで同じような施設を整備する。

ひろしまゲートパークの方は年間 100 万人の集客を目標にしているが、立地も良く歴史的に市民の愛着がある場所だから、容易にクリアできるであろう。一方、この地は新たに開拓していかなければならない。観光施設として周辺の広島城やゲートパーク、平和記念公園などと連携して都心の回遊性を高めるだけの魅力を備えることができるか否か問われている。

④ 旧陸軍被服支廠、文化財指定の方向！

県所有の 3 棟はすでに重要文化財指定に向けた調査を済ませているが、国所有の 4 号棟も足並みをそろえることで一致し、財務省及び文科省の了解が取れたようだ。

県は今年度から着手予定の耐震改修を建設資材の高騰を理由にストップさせ、重文指定を受けて国から改修費の半額の補助を受ける方向に切り替えている。

昨年度、県は活用策を考える有識者懇談会を開き、文化や芸術、生涯学習などの拠点、自然や歴史・文化・平和などを学べる拠点などの方向性を示している。

岸田首相からも「建物の活用方針が決まれば、速やかに支援したい」との言質があるので、一日も早く活用策を固め、目標を定めて国・県・市・市民が一丸となって進めていくべきであろう。

□ ほっとコーナー

下町のような風情があれば

役者・パフォーマー　大槻オサム

人混みもせかせかした生き方も苦手なので、東京のような大都会に住む気にはなれない。のんびりとした田舎暮らしには憧れるが、運転免許を持たないので、あまり田舎の方に住むのも不便だ。その点、広島は大都市ではあるが、どこか田舎くさい部分もあり、少し郊外に行けば山があり田畑もあって、そこから中心街に出るのも遠くない。そんな場所が私にはちょうどよい住処である。

そんなわけで、東京に行くことも多くは無いのだが、年に一度くらいは上京する機会がある。ただ、自分の公演や友人の劇団の手伝いに行く場合が多いので、公演場所から遠くへ行く時間はあまり無い。

この６月に東京に行った際は、少し余裕があったので、たまには少しぶらついてみようと思った。土地勘が無いのと、ついちょっとした路地が気になって目的地への最短コースから外れる癖があるので、やたら遠回りして歩くことになるのだが、その寄り道こそが、私にとっては一番楽しかったりする。

東京は先進的な大都市であるが、少し目立たぬ路地にさまよい込むと、案外に古めかしいものが残っている。下町には、まだそんなものに需要があるのかと思うような、小さな町工場や問屋さんが残っている。

今回は「丁合屋」さんを見つけて、ほほう、と思った。今時は機械で自動的に製本していくのであろうが、昔は専門の職人さんがいて、印刷した紙をページ順に並べて閉じていった、それを「丁合」と言う。

谷中銀座
（livejapan.com より）

東京は規模が大きい分、こういう今では少なくなった需要でも、必要としている人がまだいるということだろう。そういう点では、広島などは案外に古いものが残っていない。原爆で焼き尽くされたために、古いものが失われたということは大きいだろうし、東京に比べると経済規模も小さいので、需要の少ない仕事は続けられないというのもあろう。

高度成長期以降に開発された郊外では、古い商店などは少なく、大規模量販店やチェーン店ばかりになる。田舎でも都会でもない郊外がちょうどいい私だが、その点だけはどうも味気なく風情が無いことに不満を感じてしまう。

○ *中央図書館等再整備に関わる基本設計案を分析する*

7 月 24 日の広島市議会総務委員会に提出された資料が広島市のホームページ（＊リンク参照）に掲載されている。そこには「中央図書館等の再整備に係る基本設計については、オープンハウス型説明会及び障害者団体説明会において利用者から、また、広島市社会教育委員会議及び広島市立図書館協議会において有識者から、新たに整備する中央図書館等のレイアウトに関する意見を聴取し、これを広く取り入れた基本設計案を作成した。」とある。

ここでは図書館建築の経験はないが、一建築人として基本設計案を考察してみたい。

1. 再整備におけるコンセプトと再整備方針

コンセプトは、「誰もがより読書を楽しみ、広島の魅力や平和への思いを学ぶことができる情報拠点を目指す」とある。

再整備方針は、「中央図書館が備える基本的機能を多くの市民のみならず、広域都市圏内や国内外からの多くの来訪者に利用できるようにするとともに、広島に関する蓄積された図書資料を活用して広島の平和文化の情報発信を強化する」とある。

＊上記のコンセプトと再整備方針に異論はないが、崇高な目標を達成するために広島駅前の既存百貨店を改修することで可能か否かのそもそも論が欠如。観光客が貴重な時間を割いて図書館まで足を運ぶか否か疑問。国内外からの来訪者は駅前百貨店を優位付けるための後付け。

2. 機能・サービスの配置

商業施設エールエール A 館の 8 ～10 階に以下の機能・サービスを配置。（下図参照）

- **10 階**は、一般書等閲覧・貸出・カフェ・障害者サービス・上映ホール等、**「図書と映像のエリア」**
- **9 階**は、広島資料室・郷土資料館サテライト・参考閲覧室・ビジネス支援等、**「『広島を知る』エリア」**
- **8 階**は、児童書等閲覧・ヤングアダルトコーナー・自習室・グループ学習・事務室等、**「こどもと青少年のエリア」**

3. 建築コンセプト

広島らしい図書館を目指して、デルタの川や山や島などの広島の地理的特性と広島のまちづくり「都心回廊づくり」の考え方を建築空間に取り入れ、コンセプトを**「『めぐりミチ～めぐる広島、ふれあう図書館～』―広島のまちをめぐる体験を通して、本と人がふれあう―」**としている。

広島らしい「ミチ」を館内に巡らせることにより、来館者は変化にとんだ「ミチ」に誘われて館内を散策。「ミチ」沿いに「読書」と「憩い」と「学び」の空間が配置され、利用者が「本や人と出会う」「新たな広島を知る」体験ができる。

＊地理的特性やまちづくりの考え方は、本来敷地選定や外部空間の検討段階に導入する話で、インテリアの設計に取り入れるのは少し姑息な感じ。設計者も図書館本来の機能を最大限発揮できる空間を作りたいところだが、部分改修という制約のため諦めが窺える。

4. プランニング

各フロアの平面計画が示されているので、問題と思われる点を指摘。

- **図書館へのアクセス**：百貨店の客と同じ玄関とエレベーターを利用するため、図書館への入り口が各フロア 2 カ所（東の駅前側と西の裏側）、3 フロアで計 6 カ所となる。これは図書館の維持管理上の問題があり、多くのトラブルが発生する可能性がある。
- **閉架書庫が別フロア**：閉架書庫が 7 階と地下 2 階にあり、自動搬送システムを採用しなければ、図書職員の負担が大きい。仮設的な図書館に高価な自動化書庫を適用すべきかは疑問。

・**バックヤードの問題**：地上１階に図書館専用の荷さばき場（1 スパン）を増設しているが、共用と接しており、しかも前面道路が狭いため、多くの制約を受けることになる。
・**緊急避難時の問題**：高齢者や車いす利用者などは高層階から安全に避難できるか。地震時には、エレベーターも使えず、スロープもなく、バリアフリーを目指す公共建築としては問題。最上階や地下階にはレストラン等があり、火災に備えた貴重資料の保存等の対策は万全か。
・**10 階上映ホール**：現在の映像文化ライブラリーと比べるとあまりに貧弱で、広島市民はバカにされているような気がする。階高等の制約があり、難しいのであろうが、遮音や音響性能等こんな中途半端なものは不要。現地に残すか、建て替えが必要なら別地に建てるべき。
・**室内空間**：猿猴川側は窓を改装して眺望に配慮しているが、他の側は従来のままで内部の間仕切り部屋は無窓で閉鎖的。内外部が一体となった開放的な空間は望めない。

＊*プランニングにおいて一番大事なことは、そこを利用する人の声をよく聞き、プランに反映することである。このプランを見て、図書館職員の要望が反映されているとは思えない。*

５.総 括

既存の百貨店を全面改修して図書館をメインにするなら可能であろうが、部分改修して一部を市の中央図書館にするという発想自体が建築計画的には疑問。もし、このままの形で出来上がったら一体だれが責任を取るのであろう。市長の責任が大であるが、行政にも責任があり、それを許したマスコミや市民も問題ではないか。国際平和文化都市『広島』の名を辱める行為であり、現市長は一生その汚名を背負うことになるであろう。　　（1 級建築士　瀧口信二）

○「*Hihukusho ラジオ（第７５回）2023.7.30*（＊リンク参照）」*報告*

2020 年 6 月より月 2 回、1 時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「Hihukusho ラジオ（＊リンク参照）」をインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人や関心のある人が登場している。今号は第 75 回目の立花さんの発言の要点を紹介する。

ナビゲーター：土屋時子（広島文学資料保存の会代表）
ゲスト：立花志瑞雄
（NPO 法人ワールド・フレンドシップ・センター理事長）
インタビュアー：土屋時子

―生い立ちなど―

1955 年、呉市生まれ。被爆 2 世。父は 1945 年 8 月の 18 歳の時、呉から救援活動のため 3 日間広島に入り被爆。私の子どもの頃は今のような平和学習はなく、あまり意識せずに過ごした。30 歳代に入って、勤めていた会社の仕事を休み、教会関係の国際交流プログラムに参加するため 1 年間アメリカで過ごした際、10 フィート運動で作られた記録映画の上映をする。10 フィート運動は、アメリカ軍が撮影した被爆後の広島・長崎のフィルムを市民の寄付で買い取り、「にんげんをかえせ」など 3 本の記録映画を作った草の根の平和運動である。

帰国後、会社を辞め、ワールド・フレンドシップ・センターやヒロシマ・ナガサキ平和基金のスタッフとして平和に関連する仕事に携わる。その後、保育士の資格を取り、保育とキリスト教書店での仕事と二足の草鞋を履いた。

1995 年に土屋さんたちと共演した南一誠一座公演「天神町一番地～広島・あの頃・消えた町」（被爆 50 周年記念）に出た楽しい思い出がある。

2022 年に NPO 法人ワールド・フレンドシップ・センター理事長に就任。

―NPO 法人ワールド・フレンドシップ・センター（ＷＦＣ）―

ＷＦＣは 1965 年にアメリカの平和活動家バーバラ・レイノルズさんにより創設され、バーバラさんの良き理解者であった広島の外科医・原田東岷先生が初代理事長に就任。

ここではバーバラさんと深くかかわった二人の女性を紹介したい。一人は被爆者で理事でもあった竹内千代さん。バーバラさんが原爆を落とした側のアメリカ人だったので、強者の立場から原爆を落とした国を弁護したり、弱者の日本人をなだめつつ原爆使用を正当化するのではないかとわだかまりがあったが、お会いして、彼女の国境や人種を超えた人類愛に根差した世界平和を求める心に共感した。そのバーバラさんからアメリカに一時帰国する際に、アメリカ人に広島の被爆者の心を伝える何かいいものはないかと問われ、男女一対の紙人形

を作った。「平和人形」として世界平和と核兵器廃絶の願いを込めた使節として海外に届けられるようになった。

もう一人はバーバラさんが設立したウイルミントン大学の平和資料センターに展示されていた写真「バーバラと平和人形を抱く女性」の女性、二井サワエさん。名前が不詳であったが、今年2月に判明。バーバラさんが呼びかけた1964年の世界平和巡礼団に応募し、ＷＦＣの活動にも積極的に参加していたことが記された二井さんの手記により判明。

―ＷＦＣに残された資料の整理―

先達がＷＦＣの資料を段ボールに整理して保管してあるのを見つけた。理事会の議事録、年4回発行していた機関誌「友愛」や記念誌、イベント等のチラシやパンフレット、総会資料、被爆証言等を録音したカセットテープ、写真、新聞のスクラップ等々。

資料の目録作りと機関誌のファイリングとデジタル化を行い、記事の見出しのデータ化も進めた。「友愛」を読んでみると戦後の広島市民の平和への熱い思いが伝わってくる。

―ＷＦＣ２代目理事長の森下弘先生の資料―

現在92歳の森下先生は被爆者であり、高校教師、書家、詩人。自分の活動に関わる書籍や文献等の莫大な資料を自宅に保管されている。「資料が残らなければ、無かったことになる」と日頃からよく言われており、2021年からＷＦＣのボランティアがお宅に通って資料整理の手伝いをしている。まずは資料の全貌がわかるように資料の概要のまとめと目録作りから始め、所蔵されている資料のデジタル化も進めている。

資料を整理すると次に問題になるのが保存場所である。

―被爆者たちの希望―

2021年のNHK広島放送局が、被爆関係資料の扱い等について被爆者50人のアンケート調査結果をニュース映像で流していた。その結果は、後世に残したい資料があると答えた人は半数、残したい場所は6割が公的機関（そのうち8割が原爆資料館）を希望。その理由として、子や孫に引き継ぐと散逸・処分の可能性があるし、被爆の実相が次の世代に伝わらない。

原爆資料館も保管場所が手狭で今後どうするか関係機関と検討しなければいけないという学芸員のコメントを紹介。県の文書館も収蔵庫は一杯と聞いている。

―被服支廠の保存・活用について―

次の世代に資料を残し、有効に活用していくという視点が大事。身近な文化施設では図書館、美術館、博物館（原爆資料館も含む）、文書館（アーカイブズ）などがある。アーカイブズとは資料・保管場所を意味し、文書や書簡以外にもポスター・チラシ・写真・録音・録画等を保存・展示する施設だが、広島には原爆や平和に特化したアーカイブズはない。

そこで、被爆者や被爆団体・平和団体等が所蔵する貴重な資料を平和の願いと共に被服支廠に残し、来訪された方々に活用していただけないかと思う。

被服支廠の活用案として、戦前までの軍都広島や被服支廠の実態を伝える博物館、アートを通じて平和をアピールする美術館、広島ゆかりの原爆文学資料を保存する文学館など、いろいろなアイデアがあることは承知している。それらのアイデアと一体となった複合施設として「**ヒロシマ・ピース・アーカイブズ**」を提案したい。

議論は関係する公的機関だけでなく、被爆者や関心を持つ多くの市民と一緒になって進めてもらいたい。

―まとめ―

資料は次の世代のために活かせる貴重な平和の財産である。碑巡りや被爆証言に加え、アーカイブズ資料を活かし、平和学習の幅を広げることが可能。被爆体験の継承の観点から被爆証言を伝承していくことがなされているが、残された資料を通じて被爆者たちの思いを子どもたちが学習するのも伝承の一つの形となる。

そのためには資料の所有者、資料保存の専門家、ヒロシマの心を引き継ごうとする市民ボランティアが共に広島の資料を保存活用していくのがよい。

コメント

これまでの多くの人の意見を包括するような提案であり、見識の高さに頭が下がる。いつまでも議論するのではなく、一日も早く方向性が定まることを願う。

（編集委員　瀧口信二）

○被服支廠４号棟と薫風寮

わかげ会（広島大学体育会サイクリング部 OB 会）立川元英

Ⅰ. はじめに

現在の４号棟

・戦後、広島旧陸軍被服支廠４号棟（旧 10 番庫）（以下、被服支廠４号棟）に、広島大学（以下、広大）の学生寮（以下、薫風寮）があった事が、しばしば報道されています。
・私は広大在学時代、所属していたサイクリング部部員が入寮していましたので、数回立ち寄った記憶があります。
また、現在、平和公園で平和学習のガイドをしており、被服支廠の保存と活用に強い関心を、持っています。
・令和２年(2020)に、広島県被服支廠担当と広島大学文書館から、「4 号棟における薫風寮」の経緯等を整理できないか、依頼を受けました。元部員・関係者からの聞き取り、そして少ない文献の調査確認に基づき、報告します。

Ⅱ. 旧制廣島高等学校の薫風寮

皆実町薫風寮の食事風景

＊上下写真の出典：『薫風寮史』

大竹薫風寮の新入寮歓迎会

・薫風寮は、大正 13 年(1924)12 月に、旧制廣島高等学校（以下、広高）の寮として、当時の皆実町、現在の翠町の広島大学附属中学・高等学校の敷地内に、まず４寮が、設置されました。入寮者は、77 名でした。
・第２次世界大戦下では、他の学校と同様学徒動員に出ており、その動員先の一つである日本製鋼所広島製作所内に昭和 20 年（1945）７月に、移転しました。
・昭和 20 年(1945)８月６日の被爆で、多くの犠牲者も出し、また、陸軍に接収された元の寮舎も、破壊されました。
・昭和 20 年(1945)11 月に、日本製鋼所広島製作所向洋寮内で新生薫風寮は、再建されました。
・昭和 21 年(1946)２月に、旧海軍大竹潜水学校跡地に全面的に、移転しました。移転理由は、不明です。
・昭和 22 年(1947)10 月に、皆実町校舎が復興されたので自治寮として、移転復活しました。
・昭和 24 年(1949)５月に新生広大が発足し、広高と薫風寮も、広大に包含されました。
・昭和 40 年(1965)６月に、皆実町の校内の寮が撤去され、被服支廠跡に移転しました。

＊主な参考文献　『薫風寮史』　薫風寮史編集委員会　昭和 24 年(1948)（復刻版有）
『廣島高等学校創立五十年記念誌』　廣島高等学校同窓会　昭和 48 年(1973)

Ⅲ. 被服支廠４号棟

・旧陸軍被服支廠は、俗に言われます軍都広島の１施設として、大正２年(1913)８月に、現在の出汐二丁目に竣工されました。４号棟も、他の建物と同様、軍服・軍靴等の製造・修理・貯蔵が、行われていました。
・昭和 20 年(1945)８月６日の被爆で、多くの犠牲者を出すと共に、救護所となりました。その後、後述します昭和 33 年(1958)まで、何に使用されていたかは、不明です。

＊主な参考文献　『橋本秀夫の仕事ぶり』　橋本秀夫　遺稿集編集委員会　平成 21 年(2009)
『赤レンガ倉庫は語り継ぐ』　旧被服支廠の保全を願う懇談会　令和２年（2020）

Ⅳ. 被服支廠４号棟と広島大学の親和寮・薫風寮

〈親和寮〉

親和寮食事風景：個人提供

・確かな記録が残っているものとして、４号棟の西側 1/3 は昭和 33 年（1958）７月から、昭和 40 年(1965)３月まで広島大学医学部付属看護学校の女子寮の親和寮として、使用されました。全寮制で入寮者は、約 85 名でした。建物内部の余りのひどさに「幽霊屋敷」と、呼ぶ人もいました。
・当時の入寮生で、現在被服支廠近くに居住されている浜崎さんは「古い建物ではあったが中は広く、寮生活は青春時代の

良き思い出でもあります。」とも、言われています。

・昭和 40 年(1965)に親和寮は、霞キャンパス内に、移転しました。

〈薫風寮〉

・引き続き同じ場所に、昭和 40 年(1965)6 月に、男子寮の薫風寮が設置されました。

面積：1.488 ㎡　　部屋数：10 室（1 階 5 室、2 階 5 室）　　定員：53 名
家賃：100 円/月（昭和 48 年度）　光熱費：100 円/月（昭和 48 年度）

・昭和 48 年（1973）入学の鈴村延保さんの入寮時の第一印象は、「赤レンガ倉庫の改造で大部屋、まあ旧制大学の寮はこんな感じだと聞いていたし、寮費は安い、それが一番だ。寮仲間がいれば気が楽だ、相談しやすい。」でした。

・平成 6 年(1994)2 月に、他の 3 棟と共に、広島市登録被爆建物に「もの言わぬ証人」として、登録されました。

・平成 7 年(1995)3 月に、広大の東広島市への統合移転に伴い廃寮となりました。廃寮時 15 名が、住居していました。

学業に励む薫風寮生：
個人提供

看護学校若竹寮との合コン：
個人提供

【4 号棟と薫風寮の時系列の関係】

4号棟		薫風寮	
大正2年	竣工	大正13年	皆実町広高内に設立
昭和20年8月6日	午前8時15分 被爆		
昭和20年	救護所	昭和20年	日本製鋼所広島製作所内
???		昭和21年	旧海軍大竹潜水学校跡
昭和33年	親和寮	昭和22年	皆実町校内に復活
昭和40年	薫風寮 ←	移転	
平成7年	薫風寮廃寮		

落書き：広島市郷土資料館提供

＊主な参考文献　『広島大学二十五年史』　広島大学　昭和 54 年（1979）
『看護教育の 47 年の歩み』　広島大学医学部付属看護学校　平成 6 年（1994）

Ⅴ. おわりに

・まず、広島の被爆に関して、**加害性と被害性両方をもつ被服支廠**は、「広島の平和への思い」を伝える「もの言わぬ証人」として、保存・活用される事を強く要望します。

・大正 13 年(1924)12 月 4 日に、当時の広高内に開寮した薫風寮は、**数奇な運命**（被爆と 4 回の移転）をたどり、平成 7 年（1995）３月３１日に、被爆建物の被服支廠４号棟で、約７０年の歴史の幕を、閉じました。

・被爆後、この 4 号棟には、広大医学部看護学校の**女子寮の親和寮**と広大の**男子寮の薫風寮**が設置され、人間の営み（寝食）が記録されている事は、後世に是非とも継承される事を切に願望します。

○ *本「はだしのゲン」の紹介*　　著者：中沢啓治

この本は今年の 4 月から広島市の平和教育教材から作品の引用を削除された。その理由として、教育現場で説明しにくい内容が多く含まれている点を挙げているが、本を読んでみて真相がわかった気がする。

コミック版は全 10 巻からなり、4 巻までが被爆前の日常から被爆体験を中心に描き、5 巻からは被爆数年後の身の回りの不条理な生活を描く。筆者の体験に基づく描写だけに説得力がある。

戦前は軍国主義を謳歌していた町内会長が、戦後は一転して平和主義を唱える政治家の道を歩む姿は日常であり、被爆者を差別化する社会であり、原爆孤児たちが生きるため悪事に手を染めるのも現実である。その現実をユーモアをもって滑稽に描いているが、根底にある

のは戦争憎し、原爆憎しであり、その原因となる戦争を起こした人、原爆を落とした国に矛先が向く。そのため軍国主義にまい進した国家や天皇制、アメリカに敵意がむき出しとなる。

6月末、原爆死没者を慰霊する平和記念公園と旧日本軍の真珠湾攻撃を伝えるパールハーバー国立記念公園が姉妹公園協定を結んだ。「ノーモア・ヒロシマ」と「リメンバー・パールハーバー」が手を取り合おうとする姿に多くの市民は違和感を持ったであろう。

すでに日米間の和解や友好は既定の事実として定着しているにも関わらず、今さら両公園の姉妹協定を結ぼうとする広島市の意向の中に平和教材から「はだしのゲン」を削除した根源が見え隠れする。

この本は少年雑誌に連載されてから50年を迎え、今や24言語に翻訳・刊行されて世界中で読み継がれているという。日本語がわからなくても涙を流しながら頁をめくったであろうこの漫画の持つ不変の力を感じる。

原爆に家族を奪われた主人公ゲンが懸命に生き抜く姿と反戦の訴えは、メルマガ前号で紹介した「四國五郎」の生き様とダブってしまう。団塊の世代は敗戦直後の苦難の道は歩んでいないが、貧しかった生活は知っているし、その後の高度経済成長から安定成長、そして今の停滞と衰退を経験している。

現在の道徳観から見れば、戦後の混乱期の行為の中には首をかしげるところも多々あるが、「はだしのゲン」を遠ざけるのではなく、現実の姿として教えるべきではないかと思う。

混迷を深めていく世界、これからどう生きればいいのか、まだ読んでいない大人の人にこそ、この本を勧めたい。

（編集委員　瀧口信二）

□ 編集後記

おしろい気なしの中年美人

「おしろい気なしの中年美人」は、大分古くなったお酒のロゴ（キャッチコピー）であるが、薄汚れたイメージではなく、誰もが憧れる自然体の美人を表していた。しっかりした信念を持った、整った目鼻立ちのよい、すらっと背筋の伸びた姿を思い浮かべたものだ。広島の街は美しい。そこに未来の街の姿を求めていきたいと考えているのは私だけだろうか。

ここで言うしっかりした信念とは、城下町廣島、軍事都市広島そして被爆都市―国際平和文化都市ひろしまの復興、世界からの支援、国内からの支援への感謝の念を忘れないで、着の身着のままで生き延びてきた広島市民の信念である。

これらは、昭和24年(1949)8月6日に公布された我が国最初の特別法**「広島平和記念都市建設法」**に結実する。未来の街の姿である平和への希求、街の安全・持続性の確保やにぎわいづくりによる経済的発展はまちづくりでのみ実現するものだ。

まちづくりを進めるのは市長だけではない、議会だけでもない、企業でもない、もちろん行政だけでもない。市民を中心としたこれらの連帯により、定住する世代までに育成することで効果を上げている都市しか見当たらない。本号の大半の投稿はこの時を期待している。

（編集委員　前岡智之）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表